

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 47 2017. 12

栃内吉彦先生小伝 (第3回)	栃内 香次	-----	1
文学部北方民族文化展示をめぐって	津曲 敏郎	-----	5
博物館ウッドデッキが遺したもの	藤田 正一	-----	8
「ラヂオ」が生んだ新聞広告～古新聞の整理から～	久末 進一	-----	9
樺太・千島のスマレ・タイプ標本をお楽しみください	船迫 吉江	-----	10

特別寄稿

栃内吉彦先生小伝* (第3回)

北海道大学名誉教授 栃内 香次

7 巖鷲寮、巖鷲協会と父

北海道大学は、札幌農学校1期生の佐藤昌介先生、2期生の新渡戸稲造先生がいずれも岩手県人であったためか、岩手県出身者が多い。そのようないきさつで、1924(大正13)年秋に岩手県出身学生のための寮建設の動きが起こり、佐藤先生を顧問、葛西勝彌先生を委員長として建設委員会が設立された。このとき、父は、父親(栃内曾次郎)が岩手県出身であったためか、幹事長を引き受け、会計を担当された菊池武直夫先生との3人を中心として募金活動を行ったとのことである。寮は1927(昭和2)年11月に開寮し、巖鷲寮と命名された。

寮の初代理事長は葛西勝彌先生で、葛西先生が1934(昭和9)年に北里研究所に転出された後、島善鄰先生が第2代理事長に就任された。そして、1964(昭和39)年に島先生が逝去された後、三浦四郎先生が第3代理事長に就任された。以後、寮は移転改築などの大きな事業を経て現在に至るまで順調に運営されている。

ところで、巖鷲という名称は岩手県のシンボルである岩手山にちなんでいる。岩手を音読みすると「ガンシュ」となるが、岩手山に春先見える残

雪の形が翼を広げた鷲の形に似ていることから、音の似ている「巖鷲」という異名が生まれたとのことである。なお、「シュウ」を濁音にして「ガンジュ」と呼ぶならわしとなっている。

そのような由来から、札幌の岩手県人会も巖鷲協会という名称である。巖鷲協会の歴史は古く、



写真1 新渡戸稲造先生来寮記念
1931年5月19日、巖鷲寮前にて(花巻新渡戸記念館所蔵、巖鷲寮創立80周年記念誌より)
新渡戸先生が最後に来札されたときのもので、北大初期の岩手県出身者で巖鷲寮、巖鷲協会の創立とも関わりのあった方々が多数そろっている
前列右から: 2人目島善鄰先生、4人目葛西勝彌先生夫人、以下左に新渡戸先生、佐藤昌介先生、父、中村儀三郎先生

* タイトル「栃内吉彦先生小伝」は、編集委員会による

1899（明治 32）年に設立され、初代会長はやはり佐藤昌介先生であった。しかし、佐藤先生が 1939（昭和 14）年に逝去された後、ほとんど活動を休止し、再開したのは 1952（昭和 27）年であった。このとき、第 2 代会長として島 善鄰先生が就任され、島先生が急逝された 1964（昭和 39）年から父が第 3 代会長に就任して、死去するまで務めていた。

以上、巖鷺寮、巖鷺協会という岩手県に関係することがらを通じて、東京出身であったにもかかわらず、父が終生岩手県人の心を持ち続けたことと、郷土出身の先輩である島先生との長年にわたるお付き合いの深さを改めて感じる事ができた。そのような父の心情を思い、1931（昭和 6）年 5 月に新渡戸稲造先生が最後に来学されたときに巖鷺寮の前で撮影された記念写真（巖鷺寮創立 50 周年記念誌、同 80 周年記念誌に掲載）を転載させていただいた（写真 1）。

なお、寮建設の歴史については 1979（昭和 54）年 8 月に発行された巖鷺協会創立 80 周年記念誌ならびに 1983（昭和 58）年 2 月発行された巖鷺寮創立五十年記念誌に、寮建設に深く関わられた北大医学部 1 期生であった南浦邦夫先生が「巖鷺寮創設当時の思い出」という随想を寄せられ、また 1989（平成元）年 8 月発行の巖鷺協会創立 90 周年記念誌には当時巖鷺寮理事長であった魚住 悟先生が「郷土学生寮「巖鷺寮」創立と 62 年の歩み」という文を寄稿されている。本節をまとめるに際し、大変参考になった。

8 父の趣味

父には多数の趣味があり、晩年まで興味を持っていたものも多い。もともといろいろなものごとに広く好奇心を持ち、また凝り性のこともあって、やり出すと止まないところがあったようである。ジャンルも文系、理系からスポーツにいたるまで広範囲にわたっていた。

もっとも、これはその当時の北大関係者一般に言えることのようなのである。その理由として、札幌農学校から始まる北大の歴史自体が札幌の発展と重なっており、北大は札幌の文化、スポーツの拠点、発祥地となり、それらさまざまな活動に北大

の教授達がかかわっていたということが考えられる。例えば、本ボランティアニュースの第 30 号～第 35 号に連載された木原 均先生の小伝を読むと、先生はスキー普及のさきがけのお一人であっただけでなく、野球に打ち込んでおられたことが書かれている。木原先生は農学部生物学科で父と同期生で、終生お付き合いがあり、先生のことは父からいろいろ聞いていたが、野球については聞いた記憶がなく、今回初めて知ることができた。このように北大の先生方の多くが多様な文化活動を行っておられたのであろう。

そこで、これまでの各章ではほぼ編年的に父の思い出を述べてきたが、以後は年代にかかわらず、私が関心を持ったことを中心に、父の趣味、興味などについて横断的にいくつか触れて行こうと思う。

・釣り

父はいくつかのエッセイの中で釣りの話を書いている。それを讀むと、植物の採集、調査などで山に入る機会が多く、そうした採集のための山歩きの副産物として、キャンプ地では山草を採り、溪流の魚（主として岩魚）を釣って塩焼きにして酒を飲むのが何よりの御馳走であるという話が多く、釣りそのものにのめり込むというよりは、山歩きの一環としてのマルチな趣味であつたらしい。



写真 2 ソイを釣る。1954 年 8 月 5 日 網走沖にて

本人自身、自分のは正統派の釣りではないと書いている。しかし、その割にはかなり凝っていて、釣り道具もいろいろ残されている。

そのような釣りのエッセイの中に、「層雲峡の岩魚」という1篇がある。これはキャンプ地ではなく、戦前既に観光地だった層雲峡温泉で大物の岩魚を釣った話である。これは快心の釣りだったらしく、宿で仲間とともに釣った岩魚を肴に夜遅くまで飲んだ話で終わっている。

戦後は多忙になり、釣りに行くことも減ったが、農業試験場長時代、道内各地に出張した際、時間があるときは近くの川や海で釣りを楽しんだようで、文章は残されていないが、1951（昭和26）年、網走沖でソイを釣ったときの写真がある（写真2）。このソイは家への土産となり、家族でおいしく食べた。

・狩猟

釣りとならんで、父は狩猟にもかなり入れこんでいた。父の狩猟は専ら鳥打ちで、エゾシカなど大型獣の狩猟はしなかった。父の狩猟の先達は農学部生物学科の同僚であった動物学の犬飼哲夫教授と昆虫学の内田登一教授のお二人である。両先生は狩猟に関しては経験豊富で、父はこのお二人から手ほどきを受けて狩猟を始めたようである。私が知っているのは戦後になってからのことであるが、その頃は鴨猟が中心で、植苗に住んでおられた高名な鳥獣標本採集家の折居彪二郎氏のもとを訪れ、美々川一帯で鴨猟をするのが主であった。この間のことはずっと後に「植物防疫」第18巻第10号（1964）に寄稿したエッセイ「私と銃猟」に述べられている。なお、折居彪二郎氏については

「<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJJS02U/0121315100>」を参照していただきたい。

狩猟に関するエッセイには、他にも「鴨ぞうに」という1篇があり、ここでも鴨猟に触れているが、話題は鴨のお雑煮の話になり、さらにアヒルのお雑煮に、最後は雑煮から離れて戦前中国で食べたペキンダックが実に美味しかったという話で終わっていて、魚釣りと同様、結局は食の話に収束している。

なお、1954（昭和29）年に第9回国民体育大会

が北海道で開催されたが、多分この趣味との縁でクレー射撃の関係の委員を委嘱されたようである。私は父に連れられて定山溪鉄道沿線一の沢に作られたクレー射撃競技場に行き、競技を見せてもらった記憶がある。

・家庭菜園

畑を耕して種々の作物を作るのは、今では趣味の一つと言えるであろうが、多くの人々にとって戦時中から戦後にかけての一時期は、家庭菜園などという優雅な言葉とは全く無縁な、生きて行くための必須の仕事であった。我が家でもかなり多種類の作物を栽培していたが、本業が植物学である父の場合、家の畑も研究の実践の場の一つのもであった。我々子供達の眼からは、研究室で専門の文献を読み、研究室スタッフと議論をしている姿と、家に帰って畑を見回り、農薬を散布したり施肥をしている姿とが一体化していて、区別できなかった。

このように、戦中から戦後にかけての一時期は、釣り、猟、山菜採り、そして畑作りといずれをとっても趣味というよりは「実益」すなわち日々の「食」を得るための手段の一部であった。山菜とならんで父はキノコにも詳しく、食用になるキノコについていろいろ教えてもらった。定年近くなって、何回か野幌原始林にキノコ狩りに行き、札幌市内ではあまり見かけないキノコを知ったことが記憶に残っている。

ところで、山野に自生している山菜、キノコには有毒なものがあり、採取の際には十分な知識が必要である。この点、父は植物と菌類が専門であり、食用にできるか否かについての該博な知識を持っていた。それで、山菜採りでもキノコ狩りでも父の指示にしたがって安心して楽しむことができた。そのおかげで当時は私も一般的な山菜やキノコの見分けがつくようになったが、父の没後はやはり自信がもてず、後継ぎにはなれなかった。

「趣味」でなく「実益」だったこの時代の思いが残っていたためか、父は定年後少し時間の余裕ができた後もこれらの趣味を本格的に再開することはなく、植物に関する趣味の中心は草花を愛でるという、ずっと優雅な分野にシフトしていった。

・音楽

父の音楽趣味は鑑賞に限られており、歌唱、楽器演奏、創作にわたるものではない。音楽への興味がいつ頃始まったのかはわからないが、在外研究で欧米に滞在中、オペラや演奏会に行った話が散見されるので、その頃からであろう。家にある古いSPレコードには1930年代初め頃のものが多く、留学から帰国後集め始めたと思われる。

それらのレコードを見ると、いわゆる独逸系の古典ものはそれほど多くない。逆にホルストの「惑星」、スクリャービンの「法悦の詩」、ストラヴィンスキーの「ペトリューシカ」など、当時まだそれほど聴かれていなかったと思われる曲のレコードが残っている。戦後、生活によりやく多少のゆとりができて最初に買ったレコードがラヴェルの「ボレロ」で、「ずっと買いたいと思っていた」という父の言葉が印象に残っている（写真3）。



写真3 SP盤レコード。上から時計回りに、ストラヴィンスキー「ペトリューシカ」、ラヴェル「ボレロ」（戦後久しぶりに買った）、スクリャービン「法悦の詩」、ホルスト「惑星」の第2番（金星）

これも余談であるが、海外留学を経て農学部教授に任じられた時期、北大には学生オーケストラが2つあった。一つは1923（大正12）年に設立された札幌シンフォニー、もう一つはその翌年に設立された北大文武会管弦楽団である。多分教授になった頃だと思われるが、父は札幌シンフォニーの部長をしていた。私の大学院時代の恩師である故仲丸由正先生が、当時学生で札幌シンフォニー

の部員であったことをずっと後になって父から聞かされて驚いたことを思い出す。

この他、父は邦楽のレコードもかなり沢山持っていたが、これらの邦楽レコードについて話を聞いたことはなく、また私自身が興味を持たなかったこともあって、レコードの整理もせずそのままになっている。

・和歌、俳句と草花

父に限らず、明治時代に教育を受けて教養を身につけた人たちは皆、和歌や俳句の素養があり、折にふれ歌を詠んでおり、特別なことではないようである。父もそうで、さまざまな機会に歌を作っていて、在外研究で留学中に撮った写真のアルバムにも随所に感想を歌に詠んで書き込んでいる。

和歌、俳句、漢籍に関する書物にも昔から親しんでいたようである。明治40年代に出版された、大鏡、増鏡、今鏡などの歴史書から万葉集略解、八代集、俳諧俳文集などを含む国民文庫というシリーズの書物が家にあり、それらを見ると随所にしおりが挟み込まれていて、日頃からこれらを読んで参考にしていたことがわかる。その他にも多数の歌集、句集、詩集があり、その中には普通に出版された書物の他、知人等から寄贈された歌集などがかなりあって、さまざまな分野の歌好きの方々との交流があったことがわかる。

これらの中でも父の興味の中心はやはり植物で、万葉集を始めとして多数の歌集、句集から様々な歌を引用し、その中で触れられている植物、なかでも草花について書いているものが多い。後年、北海道新聞の「魚眼図」に書いた204篇のショートエッセイでもその多くについて古歌や俳句を引用し、昔の人がそれらの植物をどのように見ていたかを述べているものが極めて多い。

（次号へつづく）

トウキョウトガリネズミ

全長約70mm
体重約2g
世界最小級の哺乳類。
博物館1階の大きな
白くまの所に展示中。
12月24日（日）迄です。



特別寄稿

文学部北方民族文化展示をめぐる

北海道大学総合博物館 資料部研究員 元総合博物館長 津曲 敏郎

1. 文系館長の「足跡」

北大の研究を特徴づけるキーワードをあげるとしたら、「北方研究」は外せないところだろう。理系・文系を問わず、北方地域にかかわる自然環境と衣食住等の生活様式から、歴史文化、言語文学や思想芸術に至るまで、北の地に根ざした、あるいは北を志向したさまざまな研究が行われてきている。こうした学問研究の推進には、「星影冴かに光れる北」にあこがれるロマンチズムも、実は大きな原動力となっているように思われる。

「文系初の」という枕詞とともに館長を引き受けた当初から、当館に文系の研究を紹介するような展示が（北大の歴史や考古資料等に関する展示は別として）少ないことが気になっていた。せっかく文系から選んでもらったのだから、在任中（2011～2014年度）になにかしらの足跡でも残せたら、という思いは胸にあった。しかし、確固たるモノとして存在する豊富な理系標本資料に比べて、展示できるような文系資料はきわめて少ないのも事実だった。

北大植物園の北方民族資料室にはアイヌ文化を中心とする展示があるが、総合博物館のほうに北大の伝統でもあるアイヌ・北方民族文化をはじめ、人文系の研究に関する展示がほとんどない、というのでは「総合」の名にかかわるのではないか。そんな思いから、館長就任講演ではモノとコトになぞらえて、標本と情報の総合から理系と文系の総合、さらにそれらをつなぐヒトも加味して広くハードとソフトの総合の必要性を述べた（津曲 2011）。その後、モノ・コト・ヒトが当館のモットーとして採用されているのは「足跡」が一つ残せたようで、うれしく思っている。

2. 北方文化常設展構想から文学部展示へ

もう一つの「足跡」として、アイヌ・北方民族文化に関する常設展の新設を提案し、幸い館内の賛同を得ることができた。おりしも耐震改修工事

にともなうリニューアル構想が持ち上がり、その一環として継続的に検討されることとなった。館長としての任期終了が近づいた2015年2月、公開ボランティア講座として「北方民族の世界：常設展開設に向けて」と題して、展示構想を含めたお話をさせていただいた（津曲 2015）。2015年4月から本格的工事のため長期休館に入り、リニューアルの詳細確定や準備調整作業は中川新館長のもと、博物館スタッフにゆだねられた。中川先生には「休館中だから館長としての仕事も少ないだろう」と、いい加減なことを言ってあとを引き継いでいただいたが、その実、リニューアルオープンに向けて大変なご苦勞をおかけする結果となったことを申し訳なく思う。お陰様で、見てのとおり見事に生まれ変わり、館長はじめ教員やボランティアを含むスタッフの皆さんの熱意と努力に敬意を表したい。

リニューアル展示具体化のなかで「学部別展示」が柱の一つとして打ち出された。北大の12学部や各研究センターで行われている研究を受験生・新生を含む学生や市民にわかりやすく紹介する、というのは大学博物館としてまことにふさわしく、的確な方針であったと言えよう。ようやく文系学部も晴れて展示の場所を得ることとなった。一方、すでに準備を進めていたアイヌ・北方民族文化展示はアイヌと北方民族に分けて、前者はアイヌ・先住民研究センター、後者は文学部展示の中に組み入れて、それぞれの部局で制作を担当することとなった。アイヌ文化展示のほうは、地名研究に焦点をあてた展示からスタートしたが、リニューアル1年を経てすでに入れ替えを行い、現在はズラリと並んだ民芸品のコレクションが見事な存在感を示している。

文学部展示の企画制作には、学部内にワーキンググループが立ち上げられ、これまでの経緯から筆者も参画して北方研究を一つの核とすることが認められた。他に池田透教授の外来動物（アライ

グマ) 対策を「学部一押し研究」として取り上げ、また実験心理学的研究も紹介するなど、文学部の学問分野の幅広さを示すこととした。文学部というと机で書物に向かうイメージが強いが、それだけにおさまらないフィールド科学的側面を強調する結果となった。実際の展示制作作業には佐々木亨教授の研究室所属院生が中心となってあたり、博物館学の実践として教育的効果も得られ、その点でも他学部に一歩先んじることができたのではないかと思っている。今後、各学部で展示の更新・入れ替えをはかる際にも、ぜひ学生・院生参加が促進されることを期待したい。

3. 北方言語研究の系譜

北方関連展示としては、北大文学部の伝統であり、筆者の専門分野でもある北方言語学の系譜を取り上げた。初めに北方に限らず世界的な規模で少数民族言語が消滅の危機に瀕している現状をパネルで示した。消えゆくモノを保存し展示することが博物館の重要な使命の一つであるなら、コトバもまたその対象でありうる、というのは館長時代から述べていたことであり、ささやかながら展示として訴える場を得たのはありがたかった。今日、世界には約 6,000 の言語があるが、そのうちの半数は話者数 1 万人以下の少数言語であり、これらは今後 100 年以内に消滅することが確実視されている。話者数 100 万人以上の「安泰な」言語は全体の約 4%に過ぎないが、この 250 言語ほどのいずれかを地球上の 96%の人が母語としている。こうした少数言語をめぐる危機的状況と、言語数と話者数のアンバランスな状況は、一般にはほとんど知られていないが、生物的多様性の減少など

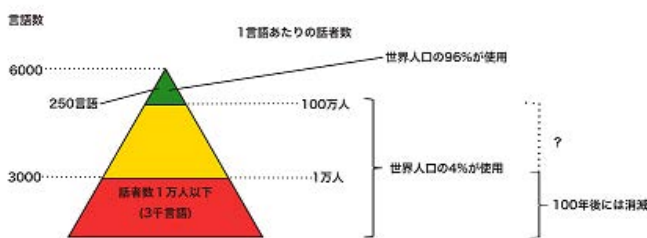


「北方言語研究の系譜」コーナー

と並んで、もっと認識されてよい。展示ではこうした「危機言語」をフィールドワークによって調査研究することの意義も示した。

次いで、文学部初代の言語学講座担当教員であった知里真志保博士（アイヌ語学）に始まって、池上二良教授（ツングース語学）から宮岡伯人教授（エスキモー語学）へと続いた北大北方言語研究の流れを、パネルとフィールドノート、刊行物等の展示で紹介した。ビジュアルな要素として、関連民族（とくに筆者がかかわってきたウイルタ、ウデヘ）の工芸品等もささやかな個人コレクションから展示した。毛皮や魚皮など身近な素材を巧みに利用した、豊かな色彩と造形美からなるアートな世界の一端に触れると同時に、伝統と現代の調和を見ることもできるだろう。

またタッチパネルを操作して、北東アジアから北米に至る（いわゆる環北太平洋の）北方先住民の民話や音楽、映像に触れられるシステム ToNP（トンプー Touch Northern Peoples）を手作りで作成し、地図パネルとセットになったハードボックス



世界の言語の状況



北方言語展示ケース

に組み込んだ。22の言語（語族を含む）に分けたコンテンツには学内外の専門家の協力をあおいで、データ提供を受けた。今後コンテンツの更新・拡充と操作性の改善が課題である。



北方民族検索システム ToNP

4. 展示関連イベントの開催

続いて、文学部で研究されてきた北方地域の一つとしてシベリアのサハ共和国に焦点をあて、野生トナカイ調査と口琴を取り上げた。口琴研究については、文学研究科で博士号を取得した荏原小百合さん（現北海道科学大学准教授）から資料の提供を受けた。展示室でトナカイ剥製とともに目を引くあでやかな民族衣装は荏原さんの私物であり、ご自身で演奏される際のステージ衣装でもある。

2016年11月にサハから著名な演奏家3名を迎えて実施した口琴レクチャー・コンサートで荏原さんが身に着けていたのを目にした方もあるだろう。ちなみにサハからのお客さんは、北大総合博

物館がマンモス標本を含め、サハの自然と文化をこれだけ取り上げていて、多くの来館者がサハ文化に触れていることに感激していた。このレクチャー・コンサートについては、荏原さん自身による詳しい報告が当イベントの共催団体である北海道民族学会の会誌にある（荏原2017）。

展示室の奥はスクリーンの前に椅子を並べて映写コーナーとし、サハの口琴製作イメージ映像と沿海地方ウデへの人々の声を集めたドキュメンタリー映画のダイジェスト版を交互に流している。後者のフルバージョンの上映会と関係者による座談会を2017年9月に開催した（『博物館ニュース』36号に報告記事を掲載）。

こうした学部展示関連イベントを重ねることも、展示の補完発展として大きな意味があると考えている。もちろん今後、映像コンテンツの拡充も含めて、展示全体の見直し・入れ替えも考えていかなければならないだろう。

なお、上記両イベントには文学研究科内に設置されている北方研究教育センターが後援として加わり、さらに口琴イベントは上述のとおり北海道民族学会と北大総合博物館との共催で実施している。北方研究教育センターについては展示室内でも簡単に紹介されているが、文学研究科の北方研究をリードする役目を担っており、展示全体にも深くかかわっている。今後も、こうした学内外の組織・団体と連携しながら、展示や関連イベントを展開していくことが双方にとって有益であり、筆者としても可能な限りかかわっていききたい。合わせてボランティアの皆さんにも展示へのご指摘や注文、イベントへの参加等でのご協力をお願いしたい。



サハ・コーナー

[参考文献]

荏原小百合 2017「レクチャー・コンサート 口琴（ホムス）から広がるサハの世界」『北海道民族学』13: 78-79.
 津曲敏郎 2011「館長就任挨拶 モノとコトの博物館」『北海道大学総合博物館ニュース』23:1.
<http://hdl.handle.net/2115/47905>
 津曲敏郎 2015「総合博物館公開ボランティア講座・館長講演 北方民族の世界：常設展開設に向けて」『北海道大学総合博物館ニュース』31:2-3.
<http://hdl.handle.net/2115/59420>

特別寄稿

博物館ウッドデッキが遺したもの

北大名誉教授 元総合博物館長 藤田正一

欧米の名だたる大学では数ある学部の中に、必ず、美術学部や音楽学部、演劇学部と言った学部を備えている。週末ともなれば近隣の市民が観劇やコンサートに大学を訪れる。こういう学問や行事の存在は大学の品位にも関わるような気がする。ハワイ大学の副学長と会見した時に、云われたことがある。「パーフォーミングアートの学部がない大学は総合大学としてのアクリディテーションで高い評価を得ることが出来ない」と。我が国の旧七帝大などの基幹総合大学には、総合大学とは言え、芸術関係の学部はない。残念なことである。これらの大学の学生が、芸術を学ぶ機会も無く、彼らとは異なる感性を持った芸術系の学生とふれあうことが出来る機会をも逸しているのだ。せめて大学の総合博物館には学問研究の進歩の紹介とともに、芸術・文化を学生や市民に発信出来る機関としての機能も望みたい。博物館を意味する英語、ミュージアム・Museum の語源はギリシャ神話の学問芸術を司る9人の女神達 Muse のいる神殿（ギリシャ語でムセイオン）から来ているという。また、音楽を意味する英語 Music の語源もこの Muse から来ている。即ち博物館と芸術や音楽とは語源的にも切っても切り離せない関係にあるのだ。

さて、この度、博物館のウッドデッキが老朽化のため、やむなく撤去されると言う。このウッドデッキは私が博物館長の時か、副学長だった時かは忘れてしまったが、大学本部にお願いして造ってもらったものである。発想は、博物館に隣接するエルムの森の木陰の芝生に座りながら音楽が聴ける、あるいは観劇出来る雰囲気学園に創出したいと言うことであった。大学とは、そこから文化の香りが溢れ出て人々を潤すところでありたいと願った。特に大学博物館は市民に開かれた大学の窓である。そうした役割を果たす場所である。芝生でくつろぐ人にも、通りすがりの人々にもエルムの木陰のステージから音楽が流れてくる。素

敵ではないか。当初は学生の音楽団体などに依頼してここをステージによくコンサートを催した。エルムの森の緑の下で聴く音楽はまことにロマンチックであった。人を介して、PMFの参加者にここで演奏をしてもらえないかを打診したこともあった。屋根のある場所でなければ出来ないと言うことなのでこれは断念した。ある年の初夏の頃であったか、ウエディングドレスを着た新婚さんらしきカップルが此処に立ち、レンガの博物館をバックに写真撮影をしていたこともあった。学生たちの団体がここでミュージアムカフェを出店していたこともある。老朽化とはいえ、撤去とはまことに残念なことである。



ウッドデッキ・コンサート 2006年5月20日

博物館ではウッドデッキでのコンサートの他に、Music in Museum と称して館内での演奏会も催して来た。博物館の一室には台風で倒れたポプラ並木のポプラの材を使って出来たチェンバロが置かれている。丁度私が博物館長だった時にこのチェンバロが完成した。その常設の場所として博物館の一室を提案して受け入れられたのである。定期的に行われるチェンバロ演奏会は、たまたま博物館を訪れた人にも思わぬ喜びを与えているようである。ウッドデッキは撤去されても、博物館には文化の香りが漂う雰囲気を維持していただきたいとねがう。

活動報告

「ラヂオ」が生んだ新聞広告～古新聞の整理から～

図書ボランティア 久末 進一

テレビの登場以前、昭和も戦後 20 年代までは「ラヂオ」が家庭の娯楽の王様だったことを、今更ながら再認識させるような新聞広告がある。

『優勝をつかんだ^{てのひら}掌！』で、ひととき目をひくのが、昭和 26 年 6 月 15 日付「北海道新聞」広告欄に掲載された森永製菓（株）の「千代ノ山」サイン入り実物大手形。左手の掌に墨を塗って白紙に押しつけたものだから、正真正銘、本人の手に間違いない。

『あなたのと比べて下さい』と誘われるまでもなく、興味津々で、子供たちがまず代わるがわる、自分の小さな手を手形にのせ、親もつられて掌を合わせ、みんながその大きさに驚いた。

昭和 26 年の大相撲夏場所で遂に 3 度めの優勝を果たし、横綱へのスピード出世を実現した「千代ノ山」は、北海道の英雄であったから、紙上で掌を合わせてみれば、その圧倒的な強さも実感できて、自分も強くなった気がした。

「千代ノ山雅信」は、松前郡福島町字福島出身、出羽海部屋。本名杉村昌治。大正 15 年生まれ。入幕は昭和 20 年 11 月場所。身長 190cm (6 尺 2 寸 5 分)、体重 122kg (32 貫 500 匁)。

力士には珍しい筋肉質の巨漢で、動きが素早く、立ち合いは突っ張りから右四つ、上手投げの荒技で一気に決める。

なにしろ当時の角界には、東富士、照国、羽黒山、鏡里、吉葉山と、強豪の好敵手が居並んでいたから、土俵上の激突はまさに真剣勝負の醍醐味があった。

国技館でのその熱戦ぶりは、ちょうど茶の間で一家が晩御飯のちゃぶ台を囲む頃の時間に、実況で NHK「ラヂオ」から放送されるのである。テレビと併せた放送などと違って、この大相撲実況中継放送は耳で勝敗のなりゆきを聞くしかなく、場内歓声や呼び出し、行司の掛け声、アナウンサーの熱弁、解説者の勝敗分析の声などが生々しく臨

場感を伝え、取り組みの様子がはっきりイメージできる迫力があつた。

そんな時代、想像した通りに「千代ノ山」の本物の手形は、たのもしく、凄かった。

その土俵人生は昭和 34 年 1 月場所まで 46 場所に及び、幕内成績 366 勝 149 敗 147 休。殊勲賞 1、敢闘賞 1、そして優勝 6 回の横綱として年寄九重部屋を開き、昭和 52 年逝去と、堂々たるものである。

実物掌紋が証明するように、大きくてもやはり同じ人間なのだと気づいた時、幼い子供心にもなぜか元気と勇気がわいてきた。

今は小さくても弱くても、一生懸命、稽古、練習し、学習すれば、こんなに強く、凄い人間になれるかもしれない。「優勝をつかんだ掌から夢をもらい、次はあなたが夢をつかもう」—そんなメッセージが聞こえてきそうだ。

戦後も間もなく、未だ戦災の跡が残り、親の大人たちも敗戦ショックから立ち直ってはいない暗い時期だけに、打ちひしがれていた子供たちの心を、この掌はわしづかみにした。

ひと粒ほおばれば、何だか強くなった気がしたミルクキャラメル (1 箱 20 円) を、こっそり買いに走った子も多く、企画したスポンサーの思わくも大当たりとなった。

「ラヂオ」の時代の戦時下をしのばせるものが「北海タイムス」昭和 15 年 10 月 7 日付の『護れ興亜の兵の家』(銃後奉公強化運動・軍事保護院、陸海軍省撰定・国民進軍歌)の歌詞広告である。放送される音楽は救いだった。

『この陽、この空、この光、アジヤは明ける巖かに一』と、軍国時代の国民精神を昂揚する歌謡曲のひとつとして、茶の間に流れた「元気が出る歌」である。聞き逃さぬように全歌詞が掲載されている。「出征兵の銃後の家族や遺族を、一億みんなで助け合って守っていこう」という呼びかけで、その「活力の源は明治キャラメル」と、明治製菓

(株)。だが、真のスポンサーは軍部の方であった。

また、昭和5年5月13日付「報知新聞」で滋強飲料のカルピス（東京渋谷）は、「ラヂオ」の六大学野球の実況中継放送に合わせて、野球ファンの学生や子供たちのために、実用可能な野球「スコア表」を新聞広告にのせた。切り抜いて放送を聞きながら打順、成績を記録、リーグ戦での最優秀打者を予想投票。抽選で100人にカルピス1ダースが当たるおまけ付きとあって、スポーツドリンクとしてイメージアップした。

こうして戦時戦後の「ラヂオ」の放送媒体を取り込んだ新聞広告は、“メディアミックス”の宣伝手法として、最近では珍しくなくなった。

いまやテレビの映像媒体が宣伝効果を独占する時代となった。その驕りからか、商品に託すスポンサーの意図が、全く不明なCMも目立つ。企画で問われているのは、受け手に対する送り手側の明確な思い入れかもしれない。

子供であれ、消費者が求めているのは、いつの時代でも夢であり、力であり、愛なのである。

昔の新聞広告には、それに応えようとする工夫があったのだ。

〔参考引用資料〕 「ウィキペディア」他、関連ネット情報参照。

樺太・千島のスマレ・タイプ標本をお楽しみください

植物ボランティア 船迫吉江

2013年5月、当博物館の企画展で「北のすみれ」がありました。その時、高橋英樹教授のご厚意で、樺太と千島のスマレのタイプ標本を含む50点を展示しました。この度、その中からタイプ標本5点をボランティア室（S224C）の壁に展示させていただきました。

タイプ標本は、植物を分類して学名を付ける時、基本となった標本です。これらの標本はネット上でも見ることができます。

できる限り、押された標本が生きていたころを思い、記録しましたので近くを通られましたら自然の中で咲き乱れるスマレの姿をぜひお楽しみいただければと思います。



カラフトタカネスミレの前の船迫吉江さん

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 47

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2017年12月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。

<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>